

一戒はそれで進んで出て来たが、香や、花や、燈燭ばかりで、飲物、食物は一つも見えない。

「何で齋を出さないのだ？」

執事や、和尚たちが驚いた。

「何處から来た和尚だ？ 和尚なら和尚の心得がありさうなものだ。何だつて大聲を上げる？」

「腹が減れば食ふのが當然だ。それを出さんと云ふのは何だ。貼札は虚言か。」

と猪一戒が喚く。冥報和尚は法座からその様子を見て、大聲を揚げた。

「初めて人身を得た豚奴。何だつて場所を荒す？」

「荒すんじゃない。早く齋を出せ。」

「手並があれば喫つて行け。」

「手並も何も入るもんか。喫ふのは何でもない。」

冥報和尚は答へはしない。目を閉ぢて念呪すると、猪一戒は俄かに頭が痛み初めた。で、茫となると、ばつたり地に倒れて、口から沫を吹き出した。侍者が見て、一齊に「阿彌陀佛。」と唱へて、和尚の法力を稱へつゝ合掌する。和尚は眼を開けて、

「死に、来たのだ。しかたがない。奥へ入れて置け。尋ねに来るものがあつたら知らせろ。」

と云つて、猪一戒も、行李も奥へしまはせた。

半偈等は村に著いたが、人が多いので早く通れない。緩々として半時ばかり歩いて村の口に出た。と、猪一戒の姿が見えない。

「どうしたらう。後になつたのではないかな。」

「怒つて走つたのですから、後になることはありませんまい。」

「でも、よく見ませう。」

と小行者は空に上つて見る。一條の大道で、何處までも見えるが、猪一戒の影も形もない。下りて来て、

「きつと後れたのですよ。」

「何で後れたのだらう？」

「道で『寺で齋を出す。』と人が云つて居ました。そこへ食ひに行つたのではないでせうか。」

「さうだらう。が、道をまちがへてはいかん。」

「寺は近くですから、後戻りして見ませう。」

と沙彌が云ふ。

「また御前を待つ様では困る。」

「いや、すぐ歸つて來ます。」

と云つて、村に歸つた。寺を聞くとすぐ分つた。前に行くと、出たり這入つたり、人が續いて居る。その中を分けて大殿の前に出る。一人の和尚がそこに居り、大勢が禮をして、齋堂の方へ行く。沙彌もそれに交つて行く。場處は二十ヶ處ばかりに分れて居る。それを一々尋ね廻るが、猪一戒の姿はない。

「食つてから、何處かで寝て居るのかな。」

と方々を探して、ふと東の廊下に来ると、二人の和尚が其處で、行李を開けて居る。「見た様な。をかしい。」と思つて見ると、半傷のもだ。すぐ衝つかつた。

「おれの師匠の行李だ。何で盗んだ？」

二人は驚いた。

「亂暴を云ふな。おれたちは知らないのだ。あの耳の大きい、口の長い和尚が師匠の法力にかゝつて仆されたその行李だ。」

「何だつて、法力にかゝつた。で、死んだのか。」

「いや、死にはしない。」

沙彌は二人を一所に左手で捕へて、右手でいきなりなぐりつけた。

「仆すとは何だ。今度は貴様たちを打ち仆すぞ。」

「大和尚のされた事だ。おれたちは知らないのだ。」

と大聲に云ふ。その聲で、大勢の和尚たちが驚いて集まつた。

「何處の和尚だ。むやみに人をなぐるのは……。大和尚の前に来い。」

と無理に、沙彌と、行李と、二人の和尚とを冥報和尚の前へ出した。冥報和尚は大聲で叱つた。

「何處から來た坊主だ？ 人をなぐるとは。亂暴だぞ。」

沙彌も喚いた。

「糞坊主。こゝは説法の寺だ。山の中の強盜の棲家ではないぞ。それに人を仆して行李を奪ふとは何事だ？」

「あの行李を擔つた口の長い和尚があまり無禮をしたから、佛から殺されたのだ。行李はこゝにある。誰がそんなものを奪るものか。」

沙彌は怒つて、

「おれの兄貴は東國から此處に來て、十万里余りも歩いた。妖怪どもにも澤山逢つたが、ちつとも疵も受けない活佛だ。それが殺されたとはどうした事だ。快く生かして返せ。返さないといひどい目に逢はずぞ。」

冥報和尚が笑つた。

「東の國から來たと云ふなら、些しは法力があらう。」

「おれは溫和しい方だが、おれの六兄貴が知つたらたゞは置かないぞ。金箍棒でこんな寺は粉微塵にしてしまふぞ。」

「貴様も余計の事を云ふ。死に、來たのか。」

と云つて、目を閉ちて合掌して念呪すると、沙彌は覺えず知らずばたと倒れて、起きられなくなつた。侍者どもはこれを見て、「阿彌陀佛。」と一齊に唱へる。和尚は侍者に、沙彌を扛いて奥へ入れさせて、行李を開けてくはしく見た。

行李の中に、通行の切手があつた。それを見ると、「僧人大願が、大唐天子の勅命で西天に行つて、經の眞解を求め。」と書いてある。

「東から來て、西へ解を求めに行く。自分の西を嫌つて東を擧げるのとは正反對だ。これを許しては、自分の教法が成立たない。呼びつけて、法力で殺してしまはう。」

と行李も奥へ運ばせ、氣の利いた二人の侍者に、

「東の國から來た和尚たちに、『齋を差上げますから。』と云つて呼んで來い。」と云ひ附けた。二人は出て行つた。

三五

半偈と小行者とは西の村の口で、沙彌と猪一戒とを待つて居たが、二人とも來ない。「どうしたのだらう？ まだ來ないが。」

「二人とも齋を食つて居るのでせう。もう來るでせう。その邊で休んで待ちませう。」

と云つて、路傍の庵の前に座つて居ると、中から圓い額、圓い頭、圓い頬の和尚が出て來た。こゝして、

「和尚、お前の死に時が來たぞ。」

と云ふ。半偈は驚かず、急いで起きて合掌して、

「さやうでございますか。が、死ぬのは覺悟して居ます。それは何時なのでせうか。」和尚はまたにこゝ笑つた。

「それが今日のだよ。」

小行者は聞いて大笑ひをした。

「餘計な事を云つて嚇かしてはいかん。師匠は修行を積んだ高德な方だ。死ぬ道理はない。」

「さうか。それならいゝだらうが、どうして二人の弟子が死んだのだ？」  
と云つて、またにこ／＼して庵に這入つた。

半偈は「二人の弟子が死んだ。」と聞いて驚いた。

「あの冥報和尚の魔法にかゝつたのであるまいか。今の話では、何か譯がありさうだ。聞いて見よう。」

と云つて庵に這入ると、にこ／＼和尚は床の上に座つて居る。半偈は恭々しく、

「只今は辱うございました。私の生命は惜しくありません。何時死んでも構ひません。しかし、二人の弟子が死んだのは、壽命が盡きたゝめでせうか、また人に殺されたのでせうか。御教へ下されば、有り難うございます。」

和尚はにこ／＼した。

「さうだ。お前もそれになるのだが、しかし、遠方から来て、靈山が近くなつて人に殺されると、前の手柄がすつかり無駄になつて残念だ。今お前に一つの法を授ける。それで難を逃れたらよからう。」

半偈は再び辭儀をした。

「有り難うございます。どうぞ御授け下さい。」

「對手が念呪する時を待つて居て、お前はそれを唱へろ。決して負けはしない。」  
と云つて、和尚はにこ／＼しながら、

「毒心爲レ仇、 毒口爲レ呪、

嚼ニ爛舌頭、 虚空不レ受、

この解毒眞言をよく覚えて置け。また逢ふ時がある。」

と云ふと、直ぐ見えなくなつた。「不思議な事だ。」と思ふ時に、二人の侍者が這入つて來た。

「東寺の冥報和尚の使でございます。『東國から御見えになつた高僧の方に、またとは御目にかかれまい。いゝ機會だから、恐れ入りますが、御立ち寄りを願ひたい。』と申すことでございます。御案内を致します。」

半偈は答へる。

「私はこゝを通つて、冥報大和尚の道法の高いことを聞いて、御目にかゝりたいと思つて居た處です。それに、二人の弟子の行方が分りませんが、大和尚は御存じかも知れませんが、御伺ひしたいとも存じて居ました。わざわざ御招きを戴きましたから、直ぐ參上致します。」  
二人は喜んで一所に出た。小行者も馬を牽いて後に續いた。

冥報和尚は、最早壇から下りて待つて居た。半偈が見ると、白眼が多くて、黒眼が少ない。鬚

が短くて、くしゃ／＼生きて居る。變つた類附だ。齋さいを食たべる僧人も、俗人も、「東から聖僧が来て、大和尚と法論をする。」と云ふので、堂に一杯上つて見て居る。

半偈は禮をした。

「私はあなたの道法の高いのを承つて、御目にかゝりたいと思つたところへ、御招きに預つて罷り出しました。まことに辱かたじけない事です。」

と冥報和尚は禮を返した。

「私は西の國の鄙やしいものですが、早くから東の佛教の盛んなのを聞いて居ます。今あなたはそこから御出になつたから、御逢ひしたいと望んで居ました。……失禮ですが、御名前は何と仰せられますか？」

「『大願』と申します。大唐の天子からは『半偈』と賜はりました。」

「はあ、さやうですか。では願大師、あなたは東國に居られたのですから御存じでせうが、東國の佛教は大變盛んで、世界中類がない。後漢に西から傳はつて以來、經を講じ、法を説くと、天から花が降り、地から蓮が湧く。奇瑞が續々あらはれる。さう盛んであるのに、あなたはそこから離れて、この西の方に来て、靈山まで行つて眞解を求められるとは、一體どうした事ですか？ 三藏の靈文れいぶんがあれば、それでよかりさうなものです。それが信するに足らんと御考へに

なつたのでせうか。」

半偈は歎息した。

「飛んだ御語です。佛が三藏の靈文を東へ傳へられましたのは、衆生濟度のためであります。その濟度の道は、心を清淨にして、貪嗔を絶ち、惡業を除く處にあります。ところが、愚か者が多くて、佛に倣まねるわざばかりして、心を修める事をしませんで、財かねを出して報むくいを得ようとかかり考へます。ですから、貪嗔はいよ／＼甚しく、惡業は一層深くなります。これでは佛の御心持とすつかり違ひますから、私は大唐天子の勅命で、骨を折つて、遠方の靈山に詣つて、眞解を求めようとするのです。全く衆生濟度のためで、外の氣持はありません。こゝの東村で清淨無爲の様子を見て、始めて、佛教の眞の風があると思ひました。ところがこゝに参りますと、あなたは『東がいゝ。』と仰せられます。どういふ事か、御教を仰ぎたいのです。」

冥報和尚は笑つた。

「人を濟度するのは佛の御慈悲ですが、財かねを出して報むくいを望むのは、貪嗔に陥るものもあるでせうが、善根はそれで自然に立ちます。一人が愚であつても、萬人がさうとは参りません。蓮花村の無榮無辱は、愚者も、賢者も一つにし、聖人も凡人も同じにするので、木と石と人と、區別がないことになります。こんなことではしやうがありません。あなたが骨を折つて眞解を求め

られるのも、畢竟無用になります。」

半偈は突つ込む。

「教は源を窮める事から發すべきです。源は清いのも、末は濁るものです。濁に溺れては仕方がありません。その源は清淨にあるのです。末の濁に任かせて、財を出させ、報を望ませたら、天下の金錢は佛者の手に落ちて、猶足りない様になるでせう。末を逐うて、本を忘れてはいけませんまい。」

冥報和尚が反問する。

「佛法は深いもので、一寸やそつとでは云ひ切れません。が、教を立てるものは、神通力を持つて居るものです。あなたは、清淨の教を立てられるのですが、どんな神通力を御持でせうか。」半偈はあつさり、

「私は一心清淨を悟つたばかりで、何の力も持つて居ません。」と答へる。冥報和尚は笑つた。

「あなたは神通力を御持ちにならないと云ふ、その事が大神通力になる譯ですな。しかし、それは信じられない。何かあるでせう。今一つ御互に試みませうか。」

「いや、何も持つて居ませんから、それは困ります。」

「法力がないのに、私の對手になるとは、とんだ間違ひですよ。」と云つて大笑ひに笑ふ。

小行者は、冥報和尚があまり無禮なので怒つて、

「老和尚、私の師匠は正人だ。そんな小さな法力などは弄ばない。そちらにあれば御相手しよう。」

と云ふと、和尚は不意なので驚いて小行者を見て、異様な容子なのに口を嚙んだ。が、すぐ、

「この人は誰れですか。」

と聞く。

「私の一の弟子で、孫小行者と云ひます。」

と半偈が答へると、和尚は小行者に向つて強く云ふ。

「自分と法力を較べようといふのか。どんな法力があるのか。」

小行者は笑つて、

「家傳に七十二變あるが、自分では毛孔の十萬八千以上持つて居る。」と云ふ。

「大きな事を云ふな。が、さう澤山あれば、一つ此方から云つて見よう。それをやり合ふか。」

「よろしい。やらう。」

「昔から、『高僧が説法すれば、天女が花を散らす。』といふ。願大師にそんな事があつたか。今まで論じあつたが、何もなかつたのはどう云ふ事か。」

「師匠は一心清浄だから、色相を留めない。だから、花が降らないのだ。おれが降らさうと思へば降らぬことはない。」

と云つて、知れないやうに、股から一握み毛を抜いて、口で嚼んで吐くと、空から匂のいい風が下つて来る。それに續いて、ちら／＼と花の雨が降り出した。それも匂がいい、色が美しい。見て居る大勢が覺えず合掌して、

「兩師の説法の御蔭で、こんなに花が降る。有り難い事だ。」

と云つて讚嘆する。冥報和尚は欣んでそれを聞いて居る。と、小行者が見て、

「この花はこちらの師匠に降るのだ。そちらの爲ではないぞ。」

と手で招くと、花は風に吹かれた様に、半偈の前に山のやうに積つた。大勢は冥報和尚に梅はず、半偈を繞つて、「活佛様」と云つて隨喜する。

冥報和尚は眞赤になつて怒つた。

「そんな事は、小兒だましに過ぎないぞ。」

半偈はそれと見て、

「仰の通り、弟子の遊戯です。」

と小行者を叱りつけて、

「はやく止めろ。」

と云ふと、小行者は身を抖はして毛を収める。それと共に、花はあとかたもなく消えてしまつた。

見て居る大勢は、一層信仰の心を起した。と見ると、冥報和尚はいよく怒つた。

「お前のやうな幻術は、愚人を哄すに止まつて居る。おれのは人の生死に關るぞ。お前たち二人の生命を取る位は何でもないのだ。今、手本を見せようか。」

「早く見せてくれ。」

と小行者が笑ふ。冥報和尚は侍者に、猪一戒と沙彌とを扛き出させる。

「どうだ。手本が見えたか。」

半偈は驚いて覺えず聲を立てた。小行者は物をも言はず、急いで二人に近づいて、身體を擦つて見た。

「大丈夫です。二人とも死んでは居ません。くたびれたから眠つて居るだけです。」

冥報和尚は笑つた。

「それなら呼んで醒ましたらよからう。」

小行者擦つて居たが、心はすぐに閻魔の廳に飛んだ。

小鬼どもが報知る間もなく、小行者は殿上に上つた。十王が出た。

「何か、急な御用ですか。」

小行者は、冥報和尚に、兄弟の二人が死んだ始末を云ふ。

「いや、此方からした事ではありません。」

「ぢや、どうして死んだのです？」

「死に方は色々ありますが、云へば長くなります。」

「が、呪はれて死んだのはどうです？」

「それは何でもありません。腹をよく揉むだけで澤山です。毒氣が下つてしまへばそれでよろし

いので……。」

小行者は大喜び、禮を云つて元の身體に歸ると、冥報和尚は笑ひながら、

「擦つてどうかなるのかな。」

小行者は返事もせず。左手で猪一戒、右手で沙彌の腹を力を入れて揉み立てる。暫くすると、兩

人とも腹がごろ／＼鳴り出した。小行者が、「これは旨い。」と一層揉むと、ふうふうと音を立て

て、二人は續けざまに氣を下した。と、猪一戒は目を開けて、ころりと起き上つた。

「長く寝た事だ。齋はどうした？」

と冥報和尚を見る。沙彌も起きて、半偈と小行者と居るのを見た。

「この和尚はひどい奴です。行李を盗んだ上に、兄貴も殺しましたぞ。また、私をも呪ひ付し

ましたぞ。」

猪一戒はそれを聞いて、

「行李を盗むために、自分を仆したのか。ひどい奴だ。」

と怒り出す。

冥報和尚は、二人が生きかへつたので驚いたが、猪一戒の云ふのを聞いて笑つて、

「行李なんか盗むものか。其處にあるぞ。」

と云ふ。沙彌は急に禪杖を取り出して、

「許されん奴だ。」

と打ちかゝる。猪一戒も釘鎧を提げて衝きかゝる。冥報和尚は笑つて、

「どうともしろ。」



と云つて動かない。と、空から一丈あまりの紅い光が現はれた。和尚の身體を取り圍んで、目に見えぬ銅の牆、鐵の壁となつた。禪杖と釘鉈とで打ち立てゝも、衝き立てゝも、すこしも壞れも、破れもしない。冥報和尚は、その中から笑ひながら、

「東國の愚僧ども、はやくこの活佛を拜まないか。」

と嘲つて居る。

小行者は急いで二人を留めた。

「うつちやつて置け。こんなものは幻に過ぎない。自然に消える。」

二人は手を止めて、立つて見て居る。と、その語の通りに、光はしばらくの間になくなつてしまつた。手を拍つて二人は大笑に笑つた。

「活佛。光はどうした。今度はこちらの清淨の教に歸依しろ。」

冥報和尚は滿身の怒だ。

「糞坊主奴、よくもおれの教法を破つたな。今から神呪を念じて、四人を残らず殺してやる。怨むな。」

と云ひ棄てゝ、目を閉ぢて念じ続ける。半偈は、「邪は正に勝たない。」と信じて、黙つてそれを聞いて居たが、耳と目とが、聞えず、見えずなりさうになつた。「呪ひ仆されては。」と思つて、

にこ／＼和尚から教へられた偈を高聲に、

「毒心爲仇、毒口爲呪、

嚼爛舌頭、虚空不受、」

三遍唱へると、自然に身が泰らかになつた。

冥報和尚は幾遍も呪文を唱へて、「もう大丈夫。」とそつと目を開けて見ると、四人ともに安然として居る。驚いて、

「こんな悪呪に倒されん筈はないのに、どうした事か。」

と舌を嚼んで、血を吐き出しつゝ、また念じ立てる。猪一戒が笑つて、

「老和尚、大概にしろ。血を出したつて、『舌頭を嚼み破つても、虚空受けず。』と師匠が唱へられたではないか。」

沙彌も接けて、

「多分喉が乾くから、血で潤すのだらう。」と嘲ける。

冥報和尚は大勢の見て居る前でからかはれて、顔中眞赤になつた。で、眼から火を出して四人を指して、

「今こそお前たちに負けたが、若し、また逢つたら決して許さないぞ。」と云ひながら眉を低れ、眼を閉ぢて、俄かに息を止めてしまつた。

小行者は見て、

「たうとう死んだか。こんな妖僧はこの方がよろしい。残しておいたつていゝ事はない。」と云ふと、半偈は、

「死んだのはしやうがないが、死んでもまた悟らんとは氣の毒だ。」と憐んだ。

大勢の僧人の中では、もとから冥報和尚の邪道を知つたものもあつたが、憚つて何も云ひ得なかつた。これらは却つて、今度の事を喜んだ。で、和尚を火葬にして、半偈に留まつて、「住持してくれ。」と頼んだ。

半偈は「勅命で行くのだから。」と斷つて、老僧の「不惹」と云ふのを後に直して、寺號も蓮花寺と改めさせた。又人々のために「清淨が主である。」ことを説くと、みんな歸依した。

事が済んだので、人々に別れて、四人はまた西へ進んだ。

二二六

半偈は冥報和尚の誤を正して、馬で村の口に出たが、これも、「あのにこ／＼和尚の御蔭だ。」と思つたので、禮を云つたり、これから前の途を尋ねたりしようと思つた。例の庵の前に来て見ると、そんなものはあとかたもない。驚いて、「これは佛師が御指圖をして下さつたのだ。」と有難く思つて、ま／＼進んで行く。途中、木は花を捧げ、草は匂を放つ。舞ふものは鶴、翔るものは鸞である。佛地が近いのを喜びつゝ行くと、忽ち前に大きな山が見える。下まで達して仰ぐと、草木が重なりあつて、路と云ふべきものがない。半偈は馬を停めて、

「道が分らない。誰かに聞きたいものだ。」

と云つて居る處に、かすかに笛の音がする。「誰か來るのだな。」と思ふ中に、牛飼の兒どもが牛に倒さに騎つて現はれた。小行者は呼び留めた。と、兒どもは牛を牽いて、にこつきながら前に來た。

「馬を停めて入らつしやるのは、道が分らないからでせう。」

「さうだ。さうだ。」

と半偈が云ふと、兒どもは、

「何處でも道です。何處でも行かれます。」

と答へる。小行者は、

「出たらめを云ふな。眞面目な事を云へ。」

と云ふと、兒どもは顔色を變へた。半偈は慰めて、

「まあ怒るな。この人は亂暴だから……一體こゝは何と云ふ？」

兒どもは氣を直して、

「こゝは大天竺國の管轄で、『雲渡山』と云ひます。くるく廻つて行けば千里もありますが、

眞直に行けば百里ばかりです。」

「その道は平らか？」

「心を静めて、ゆつくり行けば平らですが、『腹が立つと水が枯れ、氣が弱つては乗物にも乗れず、心の火が燃えると道が絶える。心の風が吹くと何でも飛ばす。』となると、どうしても通れません。」

小行者は笑つた。

「佛地が近いので、兒どもの云ふ事まで、違つて居るな。では聞くが、水もなく、渡しもないの

に、雲渡山とはどう云ふ譯か。」

「『知らざるを知らずとせよ』だ。聞くなら叮嚀に聞け。威張つて問ふ奴があるものか。」  
半偈は笑つた。

「そちらよりも、此方が聞きたい。『雲渡』と云ふのは實際どう云ふ譯か。」

「では云ひませう。この山は佛と俗との大事な分れ目です。道は二條あります。山の下路は、眞面目な人は通りますが、中々むづかしくつて、骨が折れます。ですから、山の上にまた三つの峯があつて、靈山と向ひあつて居るのですから、基根のないものが、金銀の氣を聚めて、雲で、橋を架けました。これから『雲の渡し』といふ譯で、雲渡山と云ふ事になつたのです。」  
猪一戒が口を挿んだ。

「そこに人があつて渡すのか。」

「誰も居ません。」

「どうして渡れる？」

兒どもは笑つた。

「大事な渡です。錢を下されば、御案内しませう。」

「何だつて、そんなさもない事を云ふ？」

「何でもいゝ。錢をくれなければ、案内しない。」

猪一戒は半偈に云ふ。

「あの破著物でも遣りませうか。それで悪ければあの缺けた鉢でも……。」  
兒どもは聞いて、

「和尚ではない。そんな鉢など入るものか。あとについて来てはいかん。」

と云つて、牛を連れて行つてしまつた。と、不思議に一條の路があり／＼と見えて來た。小行者は、「兒どもが異人であつた。」と悟つて、

「路があります。参りませう。」

と云ふ。半偈も大喜びで、馬に鞭を加へて、それを傳つて行く。小行者は後を趁ふ。

猪一戒はぐず／＼して居ると、沙彌が、

「十段を九段まで上つたのだ。何で行かない？」  
と云ふので猪一戒も續いた。

兒どもはもはや見えないが、牛の跡について行くと、十里あまりにもなつた。が路は平らで何の障もないので緩々と進む。半偈は馬の上で頭を低れて、念佛して居るのか、考へて居るのか分らないが、馬の行くに任して行く。猪一戒は、

「あゝ辛い。少し休まうではないか。」

と沙彌に云ふ。

「休まずに行かう。」

と沙彌は答へて、

「まあ見ろ。あすこに白いものが樹の下に見える。あれは河ではないだらうか。」

「あゝ、河だ、河だ。早く船を探して渡らうよ。」

と急いで見ると、河で、しかも大きな船がある。それへ行李を抛り込んで、猪一戒は、

「快く來い。快く來い。しあはせ、しあはせ。」

と呼ぶ。沙彌は來た。

「これはいゝが、本當にこの河で、靈山に行けるのか。どうだらう？ まあ岸へ上れ。」

「では、人に聞いて見よう。」

と船から上つた猪一戒と、岸傳ひに探して見るが、人は一人も居ない。と、石碑が一つ見える。近づいて讀むと、「通聖河」とあり、その下に、

「一行はこれ東、崑崙に至る。一行はこれ西、靈山に至る。」

と書いてある。二人は喜んで舟に歸る處へ、半偈等も來た。半偈は、

「これは何と云ふ河だ？。船は誰のものだ？」と問ふ。

「『通聖河』と云ふのです。西は靈山に行けると碑に書いてあります。船は誰のものか知れませんが、借りてもいゝと思ひます。」

半偈は黙つて居る。小行者は、

「まあ乗りませう。乗ればどうにかなるでせう。」

と馬も乗せた。猪一戒は急いで棹を取つて漕ぎ出すと、する／＼と七八里も下つた。と、水は段段浅くなり、船の進みは次第に緩くなつた。猪一戒は棹に力を入れて漕ぎ出したが、二三里進むと、次第に進まなくなつた。で、今一本の棹を沙彌に渡して二人で漕ぎ出すが、水はいよ／＼浅くなつて、船は殆んど動かない。二人は全身に汗を出して棹を使ふが、船はすつかり底について、少しの搖ぎもしない。

「もう駄目だ。岸の上つて、繩で引張らうよ。」

「さうだ。さうだ。それがよからう。」

繩を探して船につけて、岸の上つて二人で引く。初めは水はすこしはあつた。で、些かでも船は動いた。「これはいゝ具合だ。」と猶引くと、いつしか水はすつかりなくなつて、泥となつてし

まつた。船はそれにくつゝいて、いくら力を入れても進まない。

「しかたがありません。岸の上つて下さい。」

と云ふと半偈は怒つた。

「何だ。船に乗れ／＼と云つて置きながら、また船から上らせる。何と云ふ事だ？」

猪一戒は黙つてしまつた。小行者は傍からなだめて、

「あなたは、あの兒どもの云つた事を御忘れになりましたか。『腹が立つと水が枯れる。』」と云

つたではありませんか。船から御上りなさい。」

と云ふと、半偈はかへす語もなく、岸の上つて西へ進む。猪一戒も身體が軽くなつて、半偈について行きながら、

「日が暮れかゝります。どこかに泊りませう。」

と云ふと半偈は、

「船に乗つたばかりで、こんなに遅くなつたのだ。」

「さう遅いではありません。馬が早ければ大丈夫です。」

と云つて、馬の尻をつよく打つ。馬は高く嘶いて忽ち走り出した。半偈は氣を著けて居なかつたので、馬が走るに連れて揺られて落ちさうになつた。手繩を引き締め、脚で夾んで落ちない様に

しがみついて居る中に、二十里許で、やつと馬は駐まつた。半偈の顔は眞青で、汗は雨のやう、腰も、脚も、両手も痛くつて堪らない。疲れ切つて馬から下りると、地に仆れて氣力もなくなつた。が、やつと起きて、喘ぎ喘ぎして居る處へ、三人が追ひ著いた。小行者は猪一戒を叱つて、「あんまり馬を打つたものだから、こんなにくたびられたのだ。馬鹿奴、生命までも危いではないか。」

猪一戒は一言もない。半偈も、

「この畜生。飛んだ目に逢はしたな。抛りつけるぞ。」

と叱りつける。猪一戒は、

「一寸馬を叩いたばかりです。あまりぐずぐずしたものですから。」

と詫ると、小行者は、

「つべこべ云ふな。鐵棒を食はずぞ。」

と怒るので、猪一戒は荷物を挑いで黙つたまゝどん／＼行く。

「さあ、参りませう。」

「馬に駈けられて、手繩を取る力も出ない。」

と半偈が云ふと、小行者は、

「また、あの兒どもの云つた通です。「氣が弱つては乗物にも乗れない。」と。」と戒める。半偈は止むなく、立ち上つて馬に乗つた。が、身體中痛くて仕方がない。

「飛んだ目に逢つた。」

とつぶやき、つぶやきして居ると、小行者が、馬を引き停めた。

「まあ、緩くり入らつしやい。が、あの岡の向うの火はどうです。失火のやうに見えますが。」

「失火、失火。確かにさうだ。」

と沙彌も云ふ。

「こんな山の中で、どうしたのだらう？」

「今は、人が悪くなつて居ます。火を放けんとは限りません。」

と近づくと、岡の上から猪一戒が火のついた草にまみれながら、行李と一所にころんで来た。

沙彌は狼狽して駈けて行つて、火のついた草を拂つたが、猪一戒は毛を焼かれてつるつるになつて居る。

「どうしたと云ふんだ？」

と聞くが、猪一戒は何も云へない。沙彌は行李の火も拂つた。それを負つて、猪一戒を引き立てて、半偈の前に出ると、小行者は、

「何て馬鹿だ。火の中に這入るなんて。」

「這入るものか。」

「どうして焼かれた？」

「岡に來た時に、どこかに火種があるやうには見えた。何でもあるまいと上つて見ると、すつかり茅で、履み心地がいゝ。が、中ごろになると周が火になつた。それですぐ駆け下りたのだが、この通なんだ。ぐすくすれば死んでしまつたのだ。」

「さうか、命があれば幸福だ。が、どうして通らうか。」  
半偈が焦つて云ふ。と、小行者は、

「あの兒どもが『心の火が燃えると道が絶える。』と云つたではありませんか。あなたが御怒りになつて、火が出たのですよ。一體、あの兒どもの云つた事が、一々當つて居るのは不思議ではありませんか。」

と云ふので半偈は、

「なるほどさうだ。馬の事で怒つて、猪一戒を叱つた。この心持から火が起つた譯だな。さう聞くと、心が俄に涼しくなつた。」

猪一戒も力がついて、

「あれはあなたの火ですか。私の身體は構ひませんが、道が通れんと困ります。どうしませう。」  
小行者は云ふ。

「馬鹿を云ふな。見ろ。どこに火がある？」

「冗談云ふな。あの火が急に消えるものか。」

と云つて、猪一戒が頭を上げて見ると、全く火はない。喜んで、

「早く行かう。」

と云つて、一所に岡に上る。不思議な事に、あの大火が少しも見えない。猪一戒の痛みも止まり、毛の焼痕もすつかりない。岡の樹も、草も、みんなもとの通りだ。

岡を通り過ぎると、遠方に樓閣が澤山あらはれた。で、雀が躍り、鳥が飛ぶ様に騒いで騒いで、石の甍について、林の處に來た。と、忽ち風が吹き出した。

風は次第に荒くなつて、大海の波が寄せる様だ。一行は東によるけ、西に漂うて、脚を留める事も出来ない。沙彌は危く倒れるところをこらへて、行李をおろして坐つてしまつた。半偈は馬から急いで下りて轉げかゝるのを、小行者が支へた。と、毘盧帽が吹かれて何處へか飛んで行つた。猪一戒は風の出た時には、

「都合のいゝ風だ。もつと大きくなれ。靈山まで吹き著けてくれ。」

と云つて居たが、怖ろしくなつたので、後戻りして石崖のところまで來た。と、その上の松が吹き倒されて、泥と一所に落ちかゝつた。頭は外れたが、胆はつぶれた。草の中に逃げ込んで聲も立てない。

半時ばかり経つと、風の力は少し衰へた。半偈はやつと落ち著いた。

「これはどうした事だ？」

「何でもありませんまい。あの子どもが「心の風が吹き出せば、何でも吹き飛ばす。」と云ひましたぞ。それに應つて居るのではありませんか。」

「まことにさうだ。ちつとも違つて居ない。あの子どもは聖であつたのだ。知らぬものだから、飛んだ事をした。」

「濟んだ事は仕方ありません。今からが大切です。」

「さうだ。さうだ。」

と云ふ中に風は静まつた。

沙彌は起きて來た。

「あんな青天に、どうしてあんな風が吹くのでせう？」

「おれも轉げるところを、履眞に支へて貰つた位だ。が、帽子が何處かへ飛んだ、尋ねる處があ

るだらうか。」

「しかたがありますまい。あんな勢で吹いたのですから。」

半偈は無帽で行かねばならなかつた。で、立たうとするが、猪一戒が見えない。

「人まで飛ばす事はあるまいが……。」

と見廻はすと、猪一戒は草の中から頭を出して來て、著物を抖うた。

「急がうではないか。」

と半偈が云ふので、四人はまた西へ向つた。



半偈の一行は、地、水、火、風に逢つてから、胸の中がすつきりとした。道も平らであるので、悠々として進んだが、暮れさうなので、何處かに宿を借りようとして居ると、林の中に庵が見えて来た。喜んでその前に行くと、中から蓮花西村で逢つたにこゝ／＼和尙が現はれた。手に毘盧帽を持つてにこゝ／＼して、

「頭に何も無くつては、佛の御前に出られまい。一つこれを贈らう。」

と云ふ。半偈は驚き、且つ喜んで、急いで馬から下りて、帽子を受取つて、頭に載せて地上に拜伏した。

「御蔭によつて、悪僧の呪を免かれました。また帽子を下さいますして重ね／＼辱うございます。」

「路々、舟や、馬や、風や、火で、いろ／＼苦しみがあつたであらう。早く庵に這入つて御休みなさい。明日は如來の御目にかゝれるであらう。」

半偈は大喜びだ。

「明日、御前に出られませうか。」

「靈山はすぐ傍だ。御前には明日は出られる。一體、如來の御目にかゝらうと云ふのか、御心を拜まうと云ふのか。どちらだ？」

半偈は云ふ。

「私は下根のものですから、一度御姿を拜めば結構です。」

にこ／＼和尙は、

「御姿を拜むにも色々ある。色面を拜むのか、空面を拜むのか。」

と問ふ。半偈は譯が分らない。

「それはどう云ふ事なのでせう？」

「云はれん、云はれん。自然に分る。まあ休め。」

四人は庵に這入つて、一晚寝た。

天が明けたので、みんな起きて見ると、庵もなければ、にこ／＼和尙も見えない。

「佛の御現はれだ。有り難い事だ。」

と一同空に向いて拜んで、また出立した。

その邊は、花も、草も、鳥も、以前のところとは同じくない。松の下で、二人經を語つて居るものもある。石の上に一人寝て居るものもある。錫杖を鳴らして通るものもある。馬から下りて慎んで

行くと、向うに高い立派な樓閣がいくつも見える。

「多分玉眞觀でせう。」

と小行者が云ふ。

「それならば、金頂大仙が居られる筈だから、参詣して行かう。」

と半偈は這入る。見ると、大殿に大仙が立つて居て、半偈を見て、

「和尚は何處から見えられた？」

と云ふ。半偈は進んで、

「私は『大願』と申します。唐の天子の勅命で靈山に詣るものです。今幸に御前に出ましたから、参詣致します。」

大仙は喜んで、にこ／＼して、

「さうか。昔、唐の玄宗が勅命で經を取りに來られたが、路に十年あまりもかゝつた。今あなたが見えるのも、七八年かゝると思つたが、五年で來られたさうですな。近道でも通られたかな。」

「いや、一足、一足、本道を参りました。」

と半偈が答へると、

「それは痛快な事。明日は佛の御前に出て、教の奥儀を御悟りになられるだらう。」

と云つて、殿中に呼び入れて、四人に齋さいを食べさせた。

「有り難うございました。つきましては、靈山への路を御示し下されば、辱かたじけなうございます。」

と半偈が願ふと、大仙は、

「靈山はすぐだ。御教へしてもいゝが、一足、一足、實地を履んで來られたのだから、一々指し示すこともあるまい。」

と云ふ。半偈は押し返しては聞かず、禮を云つて門を出た。

四人は徐じゆかに進んだ。靈山は目の前に見えて居る。が、半時も歩いてまだ到着しない。猪一戒と沙彌とが云ふ。

「路が違つたのかな。」

「見えて居るのだから、違ひもすまいよ。」

「さうだな。路があれば自然に行ける。疑ふこともあるまい。」

と半偈は云つて、いくつかの山、いくつかの阪を通ると、大きな寺の前に出た。

「雷音寺ではないか。」

半偈は恭々しく、一段一段と上つて、第二山門まで來たが、誰も見えない。

「佛の會下には、優婆塞、優婆夷、比丘僧、比丘尼三千の大衆があると聞いて居るのに、今日は一人も居ないのは、どうしたのだらう。」

「多分、何處かで説法されるので、それを聴聞に一齊に行つたのでせう。」

「説法ならば、みんな聴聞したい。いゝ時に來たものだ。」

と云ひ合ひながら、第二の山門まで來たが、誰も見えない。遂に第三山門まで來たが、こゝにも人は居ない。

「大殿に行つて見よう。」

とそこまで來たが、こゝも同じで、一人も見えない。半偈はあまりの事に呆れて物も言はないで、小行者を見ると、小行者は、

「私を御覽になるには及びません。佛家は元は空門です。世の愚人どもが、『佛を拜まう。』と

願ふので、いろ／＼の形を御示しになるのです。この假を眞と心得て拜んで居るのです。あな

たは、清淨を以て極意となされて居ますから、佛もまた清々淨々で、眞空を示されたのです。」

半偈は黙つて居ると、猪一戒が、

「それでは西には佛はない事となる。苦勞して來るには及ばないではないか。」  
半偈は云ふ。

「履眞の云ふ事は本當だ。履眞一人の語ではない。昨日も、にこ／＼和尚が『色面と、空面とがある。』と云はれた。きつとこれは空面だ。しかし、自分は勅命で來たのだ。如來を拜またくては、復命も出來ない。」

小行者が答へて、

「いや、如來の御眼にかゝるのは、むづかしくはありません。」

と云ふと、猪一戒は、

「あんな事を云ふ。どうして佛が見えるのか。」

と笑ふ。

「では、見せてやらう。山門の外で待つて居ろ。」

と云ふので、三人は門から出ると、小行者はそつと毛を抜いて口で囁んで空に吹いて「變れ」と云ふ。すぐ八菩薩、四金剛、五百羅漢等となつて兩側に並ぶ。自分は佛となつて蓮臺の上に座る。

鐘、太鼓が一度に鳴つて、香の烟が立ち繞る。半偈が驚いて見て居る處へ、三つの門を守る六人の金剛が現はれて、

「如來の仰せだ。這入つてよい。」

と云ふ。三人は大喜びで、進んで大殿に上つた。と佛は、

「東國の僧人は、蒲團に暫く座れ。弟子どもは前に出る。」  
と云はれる。と猪一戒と沙彌とが導かれる。佛は、

「御前の名は何と云ふ。」

「私は『猪守拙』と申します。」

「私は『沙致和』と申します。」

と答へる。

「御前たちは、師匠に隨いて、遠方から來て眞解を求めるのだが、自分が説教するので、聞きに行つて誰も居ない間に、謹んで待ちもせず、彼れ是れと自分の批評をして居たのは、どうした事だ？」

「そんな事はございません。私はいつも『阿彌陀佛。』と唱へて信心致して居ります。」

「さうではない。ちやんと聞いて居るぞ。」

「そんな事は、舌が爛れても申しません。」

「では誰が云つた？」

「兄貴の履眞です。あれは猿の出身で狡猾い奴ですから。」

佛は怒られた。

「御前の兄は好人だ。御前こそ野猪の出身で、勝手に事を云つて、人を罵るひどい奴だ。あれを罵るのは、自分を罵るのと同じ事だ。金剛、野猪奴を地獄に押し込んで、舌を抜いてしまへ。」  
四人の金剛がすぐ捕へる。猪一戒は堪らず聲を上げて、

「どうぞ御許しを……。」

と詫びる。

「いやいかん。はやく舌を抜かせろ。」

と云はれる。猪一戒は大聲に喚いて、

「御師匠様。早く御救け下さう。」

と叫ぶ。半偈は急いで出て、跪いて救を乞はうとする。佛がそれを見て思はず大笑ひされると、小行者の形に變つた。

小行者は下りて半偈を扶けて、

「あの馬鹿者の云ふことを御聞きなさいますな。」

と云つて、身を抖はして毛を收めると、金剛や、菩薩や、大衆は一度に消えてしまつた。猪一戒は、飛び上つた。

「飛んだ目に逢はしたな。胆がすっかりつぶれた。」

「何だ。あの位な事は當然だ。」  
と小行者が叱る。半偈は、

「大概にしろ。が、一體佛の前に出られるだらうか。」

「御急ぎなさいますな。直ぐでせう。」

と小行者が云ひ了らない時に、にこ／＼和尙が手招きをした。

「戯はよせ。早く来て、佛を拜め。」

と云ふ。半偈は喜んだ。

「どう云ふ因縁でせうか、毎度有り難うございます。」

「因縁はある。が、それを云ふよりも、佛の前に出るのが大事だ。」

とにこ／＼和尙は、にこ／＼して云ふ。

四人はにこ／＼和尙について、東に廻り、西に繞つて行くと、山でもなく、水でもなく、寺でもなく、院でもなく、木があり、鳥が居り、霞がかゝり、樓閣もある處に來た。其處には、全體に白い光が満ちわたつて居る。にこ／＼和尙は指さして、

「あの光の中が須彌園芥子庵、即ち世尊の極樂世界だ。御用がないところに居られる。早く行つて、御目にかゝつて解を戴け。」

と云つて、行つてしまつた。

半偈は感激しつゝ、一步一步、園に進んで、門を入らうとして入らずに居ると、菩薩が出て、「そこに居るのは、東國から解を求めに來た僧人であらう。仰があるから遣入られたらよからう。」

と云ふので、半偈は一歩一拜しつゝ、三人の弟子とともに遣入ると、世尊は一塊の石の上に座つて居られる。半偈は三度禮をして、濟むと跪いた。

「申し上げます。今から二百年以前。唐の天子が玄奘に十四年を経、十萬八千里の路を通らせて、ここに參つて、經を求めて、それを國中に流布されました。が、日が久しく經つと、愚な僧達ぐろなそうだつが、眞の意義を知らず、勝手な説教をして、だんだん貧嗔びんしんに陥つて、世人を迷はしました。玄奘は悲しみに堪へず、御願をして、眞解の御分ちを得て、世人を救はうとしました。また御慈悲によつて説教の出來ない様に、經を一切封じてしまひました。これによつて、天子はまた私大願に玄奘の志を繼いで、この御山に參つて、眞解を求めさせられました。私は幸にも、たゞ五ヶ年かやうにここに參り著きました。就きましては、どうぞ、衆生の身の上を思召して、眞解を下して戴きたいのでございます。それを捧げて、中國に歸つて、貧嗔のものゝ夢を喚び醒まして遣りたいと存じます。」

と願ふ。世尊は歎息されて、

「その事はもはや知つて居る。眞解は惜しい事はない。遣りもするが、あの中國は、人の心に詐が多くて、限もない悪業を作つて居る。そこへ眞解を遣つても、何の効能も或は無いであらう。もとに反して何も無い方がよいかも知れん。」

と云はれる。半偈は押し反して、

「經を御作りになつたのも、御慈悲からであります。今、すべてをもとに反さうとされますのも、同じ御心持と存じます。しかし、私は下根で、たゞ一心で、それを翻すことが出来ません。解を戴きたいといふ心を、どうか遂げさせて戴きたいと存じます。」

と云ふと、世尊はうなづかれて、

「さう云ふならば、何巻か持つて行つて差支ない。」

と云はれる。半偈は、

「有り難うございます。どうか早く戴きたいものでございます。」

と述べる。「それでは。」と云ふので、世尊は阿難、伽葉を呼ばれた。

「玄奘が持つて行つた眞經の數は分つて居るか。」

「分つて居ます。三十五部、五千四十八卷であります。珍樓の下に註してあります。」

「では、その眞解を大願に授ける。」

と云はれる。阿難、伽葉は、

「以前 〇の時には、經の數も、難の數も、時の數も、皆佛門の九九、三三の數の通でござい

ました。今、大願のはそれと合つて居ませんが、よろしうございませうか。」

と云ふと、佛は、

「それは構はない。玄奘はもと自分の徒弟であつたが、經を聞く時、不謹慎であつたから、身に九九の數の八十一難を受けさせて、罰を完くしたのだ。大願はそのやうな因縁が全くなしで、此處に來たのだから、數に合はずとも、授けてよろしい。」

と答へさせられた。で、二人は大願を連れて珍樓の下に行つて查べると、數は間違つて居ない。

樓に上つて三十五部の中の三十五種の眞解を査べて持つて下りて、

「眞解はこれだ。よく數へて受取れ。」

と云つて、半偈に渡す。半偈は跪いて受けて、案の上に置き、合掌して二人に禮をした。眞解はあまり多くなかつた。藏めると、小さい二包になつた。半偈は猪一戒と沙彌とに一包づゝ持たせ、阿難、伽葉に附いて極樂世界に來て、佛に御禮を申し上げた。世尊は、

「御前は意思堅固で、遠方からこの西に來た功績はまことに尠くない。こゝから東へ行つて、因

縁を済したら、こゝに来て職に就け。」

と云はれる。半偈はまた、

「承りました。玄奘が、仰によつて經を封じましたが、今、解を賜りましたから、封は解いていと存じますが、如何でございませう。又木棒を戴いて、御蔭で邪魔を拂つて参りましたが、もうこゝに参りましたから、御返し申し上げますか。これも如何でございませう？」

と云ふと世尊は、

「解があれば經を封する要はない。取り去つてよろしい。木棒は返すには及ばん。人を擇んで傳へてよろしい。……唐の運も傾きかけた。御前も去れ。善因を誤つてはいけない。」

と云はれる。半偈は三度御禮を述べて、又聖たちに禮を云つて、三人を連れて園から出た。

數歩行くと、半偈は小行者に、

「身が軽くなつた。以前の様に重くなくなつた。」

と云ふ。小行者は、

「御め……ございます。眞解を戴かれたので身體に靈が通じて、空も御歩きになれませう。」と祝つて、猪一戒と沙彌とに、

「御師匠様は御身が軽くなられた。佛と成られたのだ。みんな雲に駕つて行かうではないか。」

二人は大喜びだ。

「が、馬はどうだらう？」

「大丈夫、馬も同じだ。」

と云つて、手で招くと、雲が自然に下りて來た。みんな乗つた。馬も乗つた。極樂世界を振りかへつて、

「阿彌陀佛。私たちは参ります。」

と云ふと、香ばしい風が吹いて、雲はそれに連れて東へ行つた。

半偈等四人及び龍馬は、靈山で世尊を拜んで眞解を得てから、身體が軽くなつて雲に乗れるので大喜び、眞解を護りつゝ東へ向つたが、猪一戒は半偈に、

「あなたは『實地を一足、一足行つた。』と云ふ御語がありました。今空を飛んで行くのも、やはり實地を歩くと云ふのでせうか。」

と問ふと、小行者は、

「つまらぬ事を云ふな。佛にならぬ前は、實地に一足、一足歩かれたのだが、今は佛になられたんだ。空中を雲で行かれるのも、やはり實地を歩かれるのだ。分つたか。」

と云ふと、猪一戒は悟つて、

「さうだ。さうだ。」

と黙頭いた。

大唐では、憲宗皇帝の十四年、三藏法師が現はれて經を封じてから、皇帝は大顛を西へやつて眞解を求められたが、その後永らく音沙汰がない。

生有法師は朝廷に出て、やはり御蔭を受けて居たが、講ずる經もないので、手持無沙汰であつた。従つて、一般の布施も少なく、佛事も減つて、寺は非常に寂しくなつた。生有法師は、生れつき賑やかな事が好きなので、かやうな落目になると、「みんなこれは大顛のした事だ。」と恨んだり、嫉んだりして居る。がその中たうとう亡くなつた。

憲宗皇帝は、生有法師は居なくなるし、大顛は歸らぬし、佛教の事は殆んど聞かれなかつたところへ、柳泌と云ふ方士が現はれて、巧みに道教に誘ひ込んだ。それを信じて、その献じた金丹を吞まると、俄に崩御された。これは全く、閻魔の廳で極めた通であつた。

穆宗皇帝は、憲宗皇帝に次いで立たれて、長慶と改元されて、柳泌を罰して殺させられたが、これからは、佛教と道教と對立して争ふやうになつた。

半偈等の雲は早かつた。數日經つと、長安城の上に来て下りたが、舊の通の風をして、城の繁華の處を通つた。と、人々は小行者、猪一戒、沙彌の異形なのを見て、驚いて寄つて来て取り圍んだ。猪一戒はあまりの雑踏で通り切れないので、大きな耳を振り、長い口を伸ばして嚇すと、蹴くものもあり、倒れるものもあり、大騒ぎが起つた。

その中に、宮城の正門に近づいたが、半偈は昔の通りに「すぐ這入れて、すぐ御前に出られる。」と思つた處が、意外にも咎められた。で、不審に思つて問ふと、「憲宗皇帝は、元和十五年に崩



御で、今は長子の穆宗皇帝の御代、しかも長慶四年である。」と聞かされて驚いた。で、自分の西天から歸つて来たことを詳しく述べると、役人はそのまゝ奏上した。

天子は「半偈が歸つた。」と聞かれて、すぐ御前に召された。半偈は三人を宮殿の下に立たせて、自分は進んで萬歳を唱へ、通行の切手を捧げて、先帝の勅命で、西天の雷音寺に行つて世尊に逢つて、眞解を授かつて歸つて来たことを奏上した。

天子は聞かれて、

「路はどの位あつた？ 何年かゝつた？ 眞解は何巻か？」と問はれる。半偈は、

「元和十四年に出發致しまして、只今の長慶四年まで、五ヶ年かゝりました。こゝから靈山まで、十萬八千里ございます。受けました眞解は、三十五種でございます。」

と献上する。天子は一々御覽になる。金で飾り、玉で装つた梵字の巻である。喜ばれて、席を賜ひ、茶を下されて、途中の有様、靈山の景色などを問はれる。半偈は三人の弟子を得た事、妖を降し、魔を押へた事を詳しく奏上すると、天子は一層喜ばれて、手を舞はし、足を踏んで、天子の尊さを忘れられたほどであつた。また小行者、猪一戒、沙彌を召し上げられて、

「この異相でなくては、妖怪どもは取り押へられまい。」

と仰せられた。

「眞解は、樓を造つてそこに藏めるべきだが、暫く洪福寺に預けさせよう。」と云はれて、そこへ下された。

洪福寺の住持は生有の弟子で、「不空」と云ふのであつた。「師匠が死んだのも半偈の爲だ。」と思ひ込んで居るので、今、半偈が眞解を求めて来たと聞いて、

「經が佛の仰で封じられて居るのに、また佛が眞解を下すと云ふことは無いと思ひます。誰れか、いゝ位のものを作り上げたのではありますまいか。」

と奏上した。天子は聞かれて、半偈に問はれると、半偈は、「世尊から仰があつて、封皮は私に『取つてしまへ。それでまた經を講ぜよ。』と云ふ事であります。」

と申すと、

「それでは、何時取ることにせう。」

「私には何時と申し上げられません。が、その日には、どの寺でも、臺の上に經を置いて、封が取れる様にさせて戴きたうございます。」

「では、役人に目をしらべさせて、さうさせよう。」

と云ふ中に、臣下が、「二月八日がよろしい。」と申し上げる。

半偈等は賜はつた齋を載いて、宮門を出て、またもとの半偈庵に來た。

懶雲和尚は大喜で迎へて、いろ／＼と話をした。その中に懶雲が、

「あなたはまだ御存じありますまいが、長慶の三年目でした。烏滯禪師と云ふ異様な僧が來ました。經が封じられたのを知つて、『それでは』と云ふので、新しい宗門を別に立てました。それが上手にかれこれと遣るので、信者が段々多くなつて、今は大變な勢になつて居ます。」と云ふ。半偈は眉を蹙めた。

「そんなものがあるのは、東國の禍です。論破してやりませう。何處に居ます？」

「あちこちと廻つて居て、きまつた住家がありません。」

と云ふ。翌日探し廻つたが、半偈を恐れて烏滯は何處かに隠れてしまつた。半偈は木棒を懶雲に渡し、「もし變な宗門が盛になれば、これで銅めてやれ。」と云ひ附けた。

半偈は韓退之に逢はうと思つたが、この時、退之は侍郎に陞進して、深州に行つて居るので逢はれなかつた。

その中に二月八日が近くなつた。不空は、半偈が「どうして經の封を開くだらうか。」と疑つて仲間と相談した。

「彼奴。あゝ云ふものゝ、きつとしくじるだらう。さうすれば逃げ出す。それを捕へて、師匠の恨を晴らしてやらう。」と用意した。

遂に二月八日が來た。「洪福寺で、佛の仰によつて經の封を開く。」と云ふ噂が、前から傳はつて居た。で、山の如く、海の如く、人が集まつた。天子も群臣を連れて親臨された。半偈が御出迎をする。

「一體どうして開くのか。」

と問はれる。半偈は、

「佛法には不思議がございますから、その時になると、自然に神通力がございませう。」と申し上げる。

鐘が鳴り、太鼓が響くと、半偈は立つた。臺には封をした經がちやんと備へてある。三人の弟子を臺の下に立たせて、自身は光を放つて臺に飛び上つた。

半偈は、經を捧げて西に向つて黙禱した。濟むと、臺の上に經をかへして、高い聲で、

「我佛如來は、この南瞻部洲の人々が、心に貪があり、詐が多くて、苦海に沈んで、萬劫も出る事が出来ないのを憐まれて、この三藏眞經を傳へられようとなされた。太宗皇帝はこの道を

信じられて、貞觀十三年に、陳玄奘を遣して、それを請取つて、こゝに傳へられて、信心せしめられた。ところが、年が経つに従つて、おひく邪魔が這入つて、佛の御心持に違ふことが多くなつた。で、玄奘は禍が廣がるのをひどく心配せられた。幸にも、先帝憲宗皇帝は、「この間違は、經の眞解がないから起つた事だ。」と考へさせられて、元和十四年、拙僧大願に、「靈山に參つて、眞解を求めよ。」と命ぜられた。拙僧は遠きを渉り、年を経て、こゝにそれを戴いて歸つて來た。當今の皇帝陛下はまた道を好み、善事を行はせられるので、「日を擇んで經の封を開け。」と仰せられた。今日が丁度その日に當る。拙僧は謹んで聖旨を御承けして、弟子の孫履眞に云ひ附けて、一齊に寺々の經の封を開かせる。濟むと靈山に參つて、この旨を佛に申し上げようと思ふ。」

と云ふと、小行者は飛び上つて空から、

「謹んで、仰の通に致します。」

と云つて、身を轉ばすと同時に、百千萬億の小行者が現はれた。それらが皆、

「封を開いて参ります。」

と云つて、東西南北に散つて行つた。

小行者は下りて、案の前來て、手をかけて經の金の封皮を取り去つて、經座の上に置くと、

散つた小行者は、手に手に封皮を持つて、半偈の前に積み上げた。小行者が身を抖はすと、澤山の小行者は、もとの小行者の一身に收まつた。天子も、文武百官も、無數の群衆も、一齊に讚嘆の聲を上げた。

天子は喜びに堪へられず、

「封が取れた以上は、眞の講義をして貰ひたいものだ。」

と仰せられる。半偈は承つて、眞經中から金剛經を取り上げ、眞解から金剛解を選び出して、一所に案の上に置き、香を焼き、水を添へて、朗らかに眞義を説き出した。

半偈が講じ續けて、微妙な處になると、空中から霧が下り、光が降つて、あたりに満ち渡つた。天子も、大衆も、悉く讚美するので、不空も思はず頭を下げて歸依してしまつた。

半偈はすぐ靈山に參つてこの始末を述べようとするが、天子は許されない。「三十五部を残らず講ぜよ。」と仰せられる。半偈は背かれないので、日々臺に上つて、講説を續けた。

講説が進んで三十五部の華嚴經になつた時、群衆の中から、俄に、にこ／＼和尚が現はれた。臺に向つて笑つて、

「和尚もう十分だ。行け、行け。」

と云ふ。驚いて、半偈は忙いで臺から下りて禮をした。

「聖旨であるので、止むを得ずやつて居ります。」

「經を講じる位なら、經を求めて來た人を知つて居るだらう。」

「云ふまでもなく、玄井法師です。」

「では、自分を知つて居るか。」

「分りません。」

「分らないか。よく見よ。」

と云つて、臺に飛び上つて、すぐ佛の姿を現はした。見ると、旃檀功德佛陳玄井である。」

「もう用は済んだ。すぐ自分について來い。」

と云ふ時、空中に火の眼、金の睛の菩薩が現はれた。鬪戰勝佛孫大聖である。

「早く來い。こゝに長く居る事はない。」

と云ふ聲がする。半偈は大急ぎで、天子に御別を申し上げようと思ふが、その間もない。小行者は封皮を整へる。猪一戒と沙彌とは、龍馬を引き立てる。半偈は止むを得ず、たゞ、

「陛下、私どもは参ります、眞經、眞解を大切に願ひ上げます。」

と云ふ中に、雲が綺のやうにたなびいて、六人ともに西を指して飛んで行つた。

天子も讚嘆され、百官も感泣した。天子は別に眞解を藏める樓を作らせられ、また高僧たちに

それによつて經を講じさせられた。

穆宗皇帝は、その中にはからずも崩御せられた。敬宗皇帝が次いで立たれたが、佛教の信仰が薄かつた。それを機として烏濠禪師が現はれ、新教を宣傳したので、眞の教は次第次第に失はれる様になつたが、これは後の話である。

旃檀佛陳玄井と、鬪戰勝佛孫悟空とは、半偈等を連れて靈山に向つた。著くとすぐ、旃檀佛は東國の事を詳しく申し上げた。續いて半偈は封皮を献上した。佛は喜ばれて、封皮を收めて、

「眞解で眞經を解く。この功行は軽くはない。玄井が世を憫む慈悲から起つたのだが、また大願等の師と弟子とが、遠くから來たのでなくては、事は成就しなかつたのだ。今、もう事は済んだ。職を受けたらよからう。」

と仰せられる。半偈が弟子と共に進んで出ると、

「大願、御前は清々淨々だから、清淨喜佛とする。孫履眞、御前は祖先の風があるから、あとを次いで、小鬪戰勝佛とする。猪守拙、御前は父の後を承けて、淨壇使者とする。沙致和、御前は全身羅漢の侍者で、師に代つて功を立てたのだから、また金身羅漢とする。龍馬はまた功があるのだから、在天飛龍とする。」

と云はれる。みんな一齊に喜んで禮をするが、猪一戒だけは黙つて居る。佛は、

「猪守拙、御前は職が低いと思つて嫌ふのか。」  
と仰せられると、猪一戒は、

「職の高い低いを申すのではありません。父親がいつか『淨境はたゞいゝ句を聞ぐばかりだ。』と申しました。それでは腹が満ちませんから……。」

と答へると、佛は、

「佛にらん前はさうであらう。が、なつた後には、この句が甘露にも勝るのだ。享けたらすぐ分る事だ。」

と云はれるので、猪一戒は喜んで御禮を申し上げた。旃檀佛、鬪戰勝佛等は、これを承はつて、みんな喜んで、金剛、菩薩、羅漢等と一齊に合掌して佛號を念じた。

その時、佛は眉間から白い光を出して、三千大千世界を照らされた。その光で、東方の淪んで濁つた國土も、一時に清淨な極樂世界となつた。

著者略歴  
東大國文科卒  
東京女高師名譽  
教授  
藝術院會員  
文壇 歌人

後西遊記



昭和二十三年六月一日印刷  
昭和二十三年六月十日發行

定價 金參百五拾圓

著者 尾上柴舟

發行者 堀克己

印刷者 壽印刷株式會社  
代表者 井下精一郎

發行所 堀書店

大阪市西區立賣堀南通二ノ四〇  
東京都千代田區神田保町三ノ六  
會員番號 A二〇八〇五三  
振替口座 大阪八六五〇  
東京四六五〇六

9R-9X



終